

【一】次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

「世間」という言葉を聞いたことがあるでしょうか？ ひよっとしたらないかもしれませんね。

「社会」はありますね。科目にもなっていますが、①その意味ではありません。

今から、「世間」と「社会」とは何かという説明をします。少し長い話になります。

「どうしてこんなことを読まないといけないのだろう」と思うかもしれませんが。

でも、あなたの生き苦しさや「世間」と「社会」は密接に関係しているのです。

「世間」と「社会」という二つの言葉を理解すると、あなたの生き苦しさのヒミツがよく分かるようになるのです。

この二つの言葉は、大事なキーなのです。どうか、ガマンして、読み続けて下さい。決して、難しい話ではありませんから。

「世間」というのは、あなたと、現在または将来、（A）人達のことです。

具体的には、（B）や塾で出会う友達、地域のサークルの人や（C）が、あなたにとって「世間」です。

ようにシートに座りました。

僕ともう一人の乗客は、おばさんにブロックされて、シートに座れませんでした。

一般的なルールでは、乗ってきた順番にシートに座るはずですが、このおばさんは、僕達を無視して、後ろの仲間を呼んだのです。どうです。こんな光景、見たことないですか？

僕を無視したおばさんは、冷たい人でしょうか？ そうじゃない、ということをおばさんは分かるでしょう。

このおばさんは、おばさんを知る人達の間では、おそらく、世話好きで面倒見がいいと思われるはずですが。

おばさんは、自分に関係のある人達を大切にしているのです。

「世間」は、自分と関係のある人達のことだと書きました。

「X」、「このおばさんは、自分の「世間」を大切にしているので

す。
そして、次に乗ってきた僕ともう一人の乗客は、自分と関係のない「社会」の人なのです。だから、簡単に無視できるのです。

日本人は、基本的に「世間」に生きています。

自分に関係のある人達をとて大切にします。「Y」、自分に関係のない「社会」に生きる人達は、無視して平気なのです。

それは、冷たいとかいじわるとかではなく、生きる世界が違うと思

「世間」の反対語は、「社会」です。

「社会」というのは、あなたと、現在または将来、なんの関係もない人達のことです。

例えば、（D）とか、電車で隣に座っている人とか、初めていくコンビニのバイトの人、（E）などです。

日本は②「世間」と「社会」という、二つの世界によって成り立っているのです。

具体的にどういうことか、説明しましょう。

あなたはおばさん達の団体旅行とかに出会ったことはありませんか？

昔、僕が駅で電車を待っていた時のことです。

周りにおばさん達が何人かいました。

電車がホームに入ってきて、ドアが開くと、③僕の前におばさんが駆け込みました。

そして、四人掛けのシートの前に立って、僕の後ろに向かって声をかけました。

「鈴木さん！ 山田さん！ こーこー、こーこー！」

後から来たおばさん達は、その声に従って、僕を追い越して当然の

っているからです。

あなたも、街で知り合いに会うと、気兼ねなく声をかけるでしょう。

「世間」に生きている人とは、普通に話せます。

でも、知らない人にはなかなか声をかけられないはずですが。それは、「社会」に生きる人だからです。

*『Cool Japan』に出演しているブラジル人が、ある日、僕に言いました。

「日本人は本当に優しい人達だと思う。3・11の東日本大震災の時、みんなが助け合っていた。私の国だったら、コンビニが襲われたり、交通が乱れてパニックになっていただろう。でも、日本人は、そんなことはなかった。素晴らしい」

ところが、数日後、彼は戸惑った顔をして僕に言いました。

「今日、ベビーカーを抱えた女性が、駅の階段を上ろうとしていた。彼女は、ふうふう言いながら、ベビーカーを抱えていた。信じられない。私の国なら、すぐに彼女を助けて、ベビーカーを代わりに持つてあげるだろう。④どうして日本人は彼女を助けないのか？ 日本人は優しい人達じゃなかったのか？」

どうして助けないのか、日本人のあなたなら、その理由は分かるで

しょう。

日本人は冷たいからか？ 違いますよね。

ベビーカーを抱えている女性は、あなたにとって「社会」に生きる人だからですね。

つまり、あなたと関係ない人だから、あなたは手を貸さないのです。いえ、貸せないと言ってもいいです。他人には声をかけにくいのです。

もし、その女性が、あなたの知っている人なら、あなたは間違いな

く、すぐに助けたでしょう。

冷たいとか冷たくないとか、関係ないのです。

私達日本人は、自分と関係のある「世間」の人達とは簡単に交流するけれど、自分と関係のない「社会」の人達とは、なるべく関わらないようにしているのです。

というか、より正確に言えば、関わり方が分からないのです。

（鴻上尚史『空気』を読んでも従わない」より）

*『cool japan』……筆者が司会を務めるテレビ番組。

問一 空欄「X」・「Y」に入る言葉として適切なものをそれぞれ次の中から選び、記号で答えなさい。

ア たとえ 伊 だから ウ けれど エ つまり オ さらに

問二 傍線部①「その意味」とはどのような意味か。十五字程度で答えなさい。

問三 空欄（A）に入る言葉を本文中から五字で抜き出して答えなさい。

問四 空欄（B）と（E）には次のいずれかの言葉が入る。これらを傍線部②『世間』と『社会』という、二つの世界』に分類し、それぞれ記号で答えなさい。

ア 道ですれ違った人 イ 学校のクラスメイト ウ 隣町の学校の生徒 エ 親しい近所の人達

問五 傍線部③「僕の前にいたおばさん」のとした行為を説明した次の文の空欄に入る言葉を本文中から抜き出して答えなさい。

このおばさんの行為は、「社会」的に見れば（I）に反する行為だが、「世間」的に見れば（II）行為といえる。

問六 傍線部④「どうして日本人は彼女を助けないのか？」とあるが、その理由について説明した次の文の空欄に入る内容を、（III）は十五字以内で、（IV）は五十五字以内で答えなさい。

ベビーカーの女性は（III）であり、日本人は（IV）から。

問七 「社会」の人と関わっていこうとするときに、あなたはどのような活動をしたいですか。理由も含めて百字以内で書きなさい。

【二】次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

小学五年生の翼は、クラスメイトとのケンカがきっかけで、学校に行くのがどうしても嫌になった。居場所がない翼は、祖父母であるフルバあとフルじい（＝タダシさん）のところで過ごしている。ある日、翼はフリースクールに通っている従妹のまいちゃんに会いに行く。

三人でいつものようにゆつくりと海岸を歩いた。

フルバあは、いつもの場所で立ち止まった。そして、夕日に向かって手を合わせた。

「お兄ちゃん、今日も平和でよかったよ。あたりまえに生きて、あたりまえにご飯を食べて、あたりまえに畑の手入れをして、こうやってひ孫と散歩をしています。ありがたいことです」

まいちゃんも真似をして手を合わせた。

「あたりまえに生きて、ご飯を食べて、翼と話をしました。わたしも翼も一歩前進しました。今日も平和で良かったです」

ぼくも手を合わせて言ってみた。

「義男さん、ぼくも一歩前進しました」

まいちゃんが言った。

「翼、知ってた？ 義男さんって特攻隊員だったんだよ」

「え？」

「太平洋戦争の終わりに、片道の燃料だけを積んで敵に飛行機ごと体当たりした無茶な作戦の隊員だったの」

「そんなの全然知らない。そういえばフルじいが、びわの木を植え替えたとき、義男さんが出撃前の一時帰宅だって言ってた。それって特攻隊の出撃のことだったの？」

特攻隊って聞いたことはある。だけど映画とかテレビとかで見るだけで、**A** 親類にいるなんて思いもしなかった。びわしごのとき、フルバあが話してくれたお兄ちゃんのこと。亡くなったのは、病気でも事故でもなくて十七才で特攻隊員として飛び立ったからなんだ。

急に、得体のしれないおそろしさが背筋を走った。

「お兄ちゃんがね、飛行訓練しているときによく手紙をくれたんだよ。夕日を見ると庭のびわと、大きな口をあけて食べるわたしの顔を思い出すって」

「訓練のときにそんな思い出話の手紙を書いたの？ なんか、もっとお国のためにどうのこうのって、そんなの書くのかと思ってた」

ぼくが言うと、フルバあはさびしそうな顔をした。

「**B** 夕日を見て不安になったときに、わたしたちのことを思い出して気持ちを落ち着かせたんだろうね」

「①夕日を見ると、不安になるってどういうこと？」

ぼくの疑問に、まいちゃんが答えた。

「特攻隊員は、朝日か夕日の時間に飛び立ったんだって。そのぼんやりした時間だと敵に発見されにくいからだったらしい」

フルバあもうなずいた。

「*₂ 知覧から飛んだ人、*₃ 鹿屋から飛んだ人、みんな朝日や夕日の中、いろんな思いをいだいて飛んだんだろうね。お兄ちゃんもその時間、飛び立つ人を見送ったり、自分が飛び立つことを思ったり、心穏やかでいられなかったんだと思うがよ。お兄ちゃんはね、わたしにもタダシさんにも何通も手紙を書いてくれたよ。タダシさんには、ケンカばかりして悪かったって」

「それ、フルじいも言っていた。義男さんとフルじいは、なんでケンカしてたの？」

「他愛もないことだよ。タダシさんの家も昔はびわ畑があったんだ。うちのどちらがおいしいか、大きいか、たくさんできたかってことで言い争うわけよ」

それぐらいのケンカなんて本当に②ささいなことだよな。ぼくと佐希のことも、人から見ればささいなことなんだろうな。

「でも、タダシさんのびわ畑は空襲でだめになったんだよ。その中に一本だけ無事なのを見つけて、それをうちの裏に植えたの。そのあとお兄ちゃんはまた基地にもどった。昔々のケンカも、お互いさつさと謝れば、楽しい時間がもっと過ごせたのにね」

フルじいが長く手をあてていた一番奥のびわの木。③あの木への思いは本当に特別なものなんだろうな。

「お兄ちゃんからタダシさんへの何通目かの手紙に、もうそろそろ飛ばすはずだから、びわ畑とわたしのことを頼むって書いてあったんだっ

て」

特攻隊員が飛ぶというのは、『死』を意味している。ぼくにもそれぐらいはわかる。『死』の先には何も無い。謝ることも許すことももうできない。『死ね』って言葉は、嫌いとかあつちに行けじゃない。先生が安易に使ってはいけないと言ったその意味がすとんと胸に落ちた。「戦争とか特攻隊員とか、ずうっと昔のことではぼくには関係ないと思ってた」

まいちゃんもうなずいた。

「だよね。わたしだって、太平洋戦争の話は、夏になるとテレビや映画であるよなああってくらいで、正直ピンときてなかった。だから、義男さんが特攻隊員だったって聞いて、すごくショックだったの。それから特攻隊のことが知りたくなって、知覧の記念館や、鹿屋にも行ったんだ。^{*4}出水や^{*5}始良にも特攻基地があつたって、調べてわかった」

フルばあは、まいちゃんの顔をじつと見ている。

「わたしたちにとつて、あの戦争は社会で習う歴史の一つで、経験した人は高齢化して『語り継ぐ人』が少なくなっているんだ。フルばあみたいに今日も平和だったよつていう人がいなくなったらどうなるんだろう。今は戦後じゃなくて戦前だって言われることもあるし、それで大丈夫なのかなって思つてさ。だからわたしはそのことをレポートにしたんだ」

この間、提出したつて言つてたレポートのことか。

「まいちゃん、すごいね」

ぼくは心底感心した。

「まあね。先生に、ほめられたよ。フルばあ、ありがとうね！」

「それはよかった」

「わたし十七才なんだよね。義男さんと同じ年。これから先は義男さんが生きることができなかった年月なんだ。それを考えると、何かができるというなつて思うの」

目の前にいるまいちゃんと同じ年だった義男さん。びわとフルばあのことを託^{たく}して飛び立ったのは、まいちゃんと同級生。六年後のぼくなんだ。

「だからわたしね、大学に行つて福祉の資格を取りたいんだ。フルばあみたいな人にたくさん会つて話を聞きたいなつて。そのためにも資格があつたほうがいいからね。わたしが次の一步にすすめたのは、義男さんとフルじいの話を聞いたことも大きかったかな。今は、自分で次を見つけることができる『平和な時代』なんかもん」

まいちゃんの言っていることは少し難しい。だけど、自分で考えて自分で決めることが大切だつてことはわかる。戦争のときはそれができなかったつてことだ。

「ごめんね。なんか一人で語っちゃつて。そういえば、ミヤちゃんが転校するんだつて話してくれたのも、ここ。防波堤に座つて二人で泣きながらびわを食べたの。夕日が沈んでいく間、家から持ってきたかごいっぱいびわをずっと二人で食べたんだ。おかげで次の日お腹こわしちゃったけど」

まいちゃんは「その日」のことを話してくれた。

「ミヤちゃんがいなくなつたら、もうこの世にひとりつきりつて気がしたんだよね」

ぼくもそうだ。ひとりぼっちだと思つた。そのとき、まいちゃんが来てくれたんだ。

そして、やつと考えることができた。

「ぼくは、もっと早く自分と向き合つて、ケンカしたやつの気持ちを考えればよかったのかなあ。無駄に時間を過ごしたのかな」

まいちゃんが優しく笑つた。

「そうじゃないと思うよ。翼には、向き合うまでの時間が必要だったの。^{*6}垂水^{たるみず}に来て過^たした時間は無駄じゃない。いろんな選択肢も見つけることができた大切な時間だよ。わたしだって何年もかかつてるんだから」

フルばあもうなずいた。

「じゃつのよ（そうだよ）。翼くんもまいちゃんも、ゆつくり時間をかけたらいいんだよ。それに人間はひとりぼっちじゃないし、十点満点でなくていいの。五点で充分。足りない分は周りが助けてくれるもんだよ。翼くんはまいちゃんに助けられた。まいちゃんも周りの人に助けられた。それでいいの。がんばりすぎないでいいんだよ」

④フルばああの言葉にぼくとまいちゃんは顔を合わせた。まいちゃんがにこつと笑つた。

「だよね。がんばりすぎないでいこう！」

海は金色の道をつくって、白い砂浜も色を変える。それを見つめるフルばあの顔は夕日色だ。しわの奥の小さい目がキラキラ光っていた。

(もりなつこ「びわ色のドッジボール」より)

(注) *1 義男さん……フルばあの兄で、フルじいとは幼なじみ。

*2 ～6 知覧・鹿屋・出水・始良・垂水 ……それぞれ鹿児島県内の地名。

問一 空欄 A・B に入る言葉として適切なものをそれぞれ選び、記号で答えなさい。

ア きつと イ あまり ウ まさか エ もつと

問二 傍線部①の「夕日を見ると、不安になる」について、誰の、どのような気持ちを言っているのか。本文中の言葉をつかって、四十字以内で答えなさい。

問三 傍線部②の「ささいなこと」とほぼ同じ意味の言葉を本文中から五字程度で抜き出して答えなさい。

問四 傍線部③の「あの木への思いは本当に特別なものなんだろうな。」について、なぜ「特別なもの」なのか、次のア～エの中から最も適切なものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア フルじいにとって、特攻隊員として出撃した義男さんから妹とともに託された、大切なビワの木だから。
 イ フルじいにとって、特攻隊員として出撃した義男さんと一緒に食べた、大切な思い出のビワの木だから。
 ウ フルばあにとって、特攻隊員として命を落とした義男さんとの思い出がある、大切なビワの木だから。
 エ フルばあにとって、特攻隊員として命を落とした義男さんから託された、庭の大切なビワの木だから。

問五 傍線部④「フルばあの言葉にぼくとまいちゃんは顔を合わせた」とあるが、「ぼくとまいちゃん」は、フルばあの言葉からどのようなことに気づいたのか。本文中の言葉を使って七十字以内で答えなさい。

【三】次の各問いに答えなさい。

問一 次の傍線部の読みをひらがなで書きなさい。

- ① 風情ある景観が飛び込んできた。
- ② このお寺は平安時代に建立された。
- ③ 常夏の島へ旅行する。

問二 次の傍線部を漢字で書きなさい。

- ① クラス合唱のシキ者を選ばれる。
- ② 本番前にフクソウを整える。
- ③ 見事なプレーにサンジを送る。
- ④ 彼のズノウは優れている。
- ⑤ チョメイな画家の展覧会がある。
- ⑥ ダンケツしてゴールを目指す。

問三 次の傍線部を漢字に直したものととして適切なものをそれぞれ下のア～エから選んで答えなさい。

- ① 研究タイショウを決める。 ア 対照 イ 対象 ウ 対称 エ 対償
- ② カンシンな生徒だ。 ア 歓心 イ 関心 ウ 感心 エ 寒心
- ③ カイシンのできればだ。 ア 会心 イ 改心 ウ 改新 エ 回診

問四 次の熟語と同じ構成のものをそれぞれ下のア～エから選んで答えなさい。

- ① 県立 ア 伝達 イ 未熟 ウ 乗車 エ 日照
- ② 登山 ア 温暖 イ 読書 ウ 笑顔 エ 左右

問五 次の空欄に入る言葉として最も適切なものを後のア～エからそれぞれ選んで答えなさい。

- ① 彼は今では包丁すら握らなくなってしまうが、かつては（ ）料理人だった。
ア 鼻が利く イ 影が薄い ウ 息が合う エ 腕が立つ
- ② 彼女は孫の立派に成長した姿に、思わず（ ）。
ア 目を配った イ 目を細めた ウ 目を光らせた エ 目を付けた
- ③ 立派な計画だが実現しそうにない。まるで（ ）だ。
ア 絵に描いた餅 イ 雨後の竹の子 ウ 棚からぼた餅 エ 手前味噌
- ④ 自分で育てた作物だけで生活する（ ）の暮らしにここがれる。
ア 自画自賛 イ 自業自得 ウ 自給自足 エ 自由自在
- ⑤ 毎日コツコツ練習することが大切。（ ）では身につかないよ。
ア 一言一句 イ 一挙一動 ウ 一朝一夕 エ 一日一善

問六 例にならって、傍線部に係る文節に二重線を引きなさい。

（例） 美しい／花が／咲いた。

- ① いかなる／理由が／あっても／やりとげなければ／ならない。
- ② 弟は／昔から／夏目漱石の／小説を／熱心に／読んでいる。
- ③ 私の／誕生日に／大好きな／チーズケーキを／母に／作ってもらった／思い出が／ある。

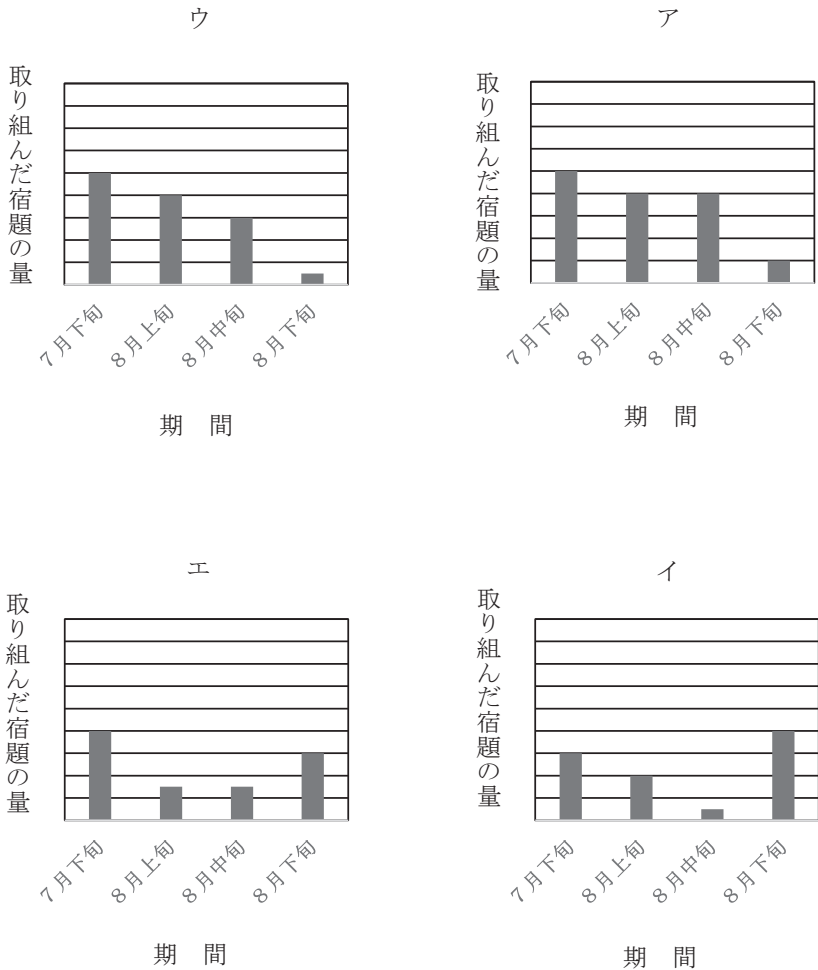
問七 次の条件に従って文章を作りなさい。

- ① 中学生になって挑戦したいことについて書く。
- ② 二文で構成する。
- ③ 二文目の冒頭に「だから」を用いる。

問八 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

「文章」Aさんは夏休みの宿題を早く終わらせようと思って最初は真面目に取り組んだが、段々と気が抜けてしまった。あせって夏休み終了直前に一生懸命勉強したが、少しだけ終わっていない宿題もあった。

「問い」横軸に「期間」、たて軸に「取り組んだ宿題の量」を表した図として最も適切なものを次のア～エの中から選んで答えなさい。



名前

社会

問
四

いかなる／理由か／あつても／やりとげなければ／ならない。

弟は／昔から／夏目漱石の／小説を／熱心に／読んでいる。

私の／誕生日に／大好きな／チーズケーキを／母に／作つてもらつた／思い出が／ある。

入学試験問題 国語 解答例

受験番号	
名前	

一									
問一	X	エ	Y	ウ	問三	問二	問一	問六	問七
					関係のあ	科目として		IV 交流する関係のあり方	
					る	ての			
					問四				
					世間				
					社会一	社会一		III 「自分と関係のある人達を大切にしている」	
					社会一	社会一			
					社会一	社会一			
					社会一	社会一			
					社会一	社会一		II 世話好きで面倒見がいい （別解）自分に関係のある人達を大切にしている	
					社会一	社会一			
					社会一	社会一			
					社会一	社会一			
					社会一	社会一		I 一般的なクル	
					社会一	社会一			
					社会一	社会一			
					社会一	社会一			
					社会一	社会一		I 一般的なクル	
					社会一	社会一			
					社会一	社会一			
					社会一	社会一			
					社会一	社会一		I 一般的なクル	
					社会一	社会一			
					社会一	社会一			
					社会一	社会一			
					社会一	社会一		I 一般的なクル	
					社会一	社会一			
					社会一	社会一			
					社会一	社会一			
					社会一	社会一		I 一般的なクル	
					社会一	社会一			
					社会一	社会一			
					社会一	社会一			
					社会一	社会一		I 一般的なクル	
					社会一	社会一			
					社会一	社会一			
					社会一	社会一			
					社会一	社会一		I 一般的なクル	
					社会一	社会一			
					社会一	社会一			
					社会一	社会一			
					社会一	社会一		I 一般的なクル	
					社会一	社会一			
					社会一	社会一			
					社会一	社会一			
					社会一	社会一		I 一般的なクル	
					社会一	社会一			
					社会一	社会一			
					社会一	社会一			
					社会一	社会一		I 一般的なクル	
					社会一	社会一			
					社会一	社会一			
					社会一	社会一			
					社会一	社会一		I 一般的なクル	
					社会一	社会一			
					社会一	社会一			
					社会一	社会一			
					社会一	社会一		I 一般的なクル	
					社会一	社会一			
					社会一	社会一			
					社会一	社会一			
					社会一	社会一		I 一般的なクル	
					社会一	社会一			
					社会一	社会一			
					社会一	社会一			
					社会一	社会一		I 一般的なクル	
					社会一	社会一			
					社会一	社会一			
					社会一	社会一			
					社会一	社会一		I 一般的なクル	
					社会一	社会一			
					社会一	社会一			
					社会一	社会一			
					社会一	社会一		I 一般的なクル	
					社会一	社会一			
					社会一	社会一			
					社会一	社会一			
					社会一	社会一		I 一般的なクル	
					社会一	社会一			
					社会一	社会一			
					社会一	社会一			
					社会一	社会一		I 一般的なクル	
					社会一	社会一			
					社会一	社会一			
					社会一	社会一			
					社会一	社会一		I 一般的なクル	
					社会一	社会一			
					社会一	社会一			
					社会一	社会一			
					社会一	社会一		I 一般的なクル	
					社会一	社会一			
					社会一	社会一			
					社会一	社会一			
					社会一	社会一		I 一般的なクル	
					社会一	社会一			
					社会一	社会一			
					社会一	社会一			
					社会一	社会一		I 一般的なクル	
					社会一	社会一			
					社会一	社会一			
					社会一	社会一			
					社会一	社会一		I 一般的なクル	
					社会一	社会一			
					社会一	社会一			
					社会一	社会一			
					社会一	社会一		I 一般的なクル	
					社会一	社会一			
					社会一	社会一			
					社会一	社会一			
					社会一	社会一		I 一般的なクル	
					社会一	社会一			
					社会一	社会一			
					社会一	社会一			
					社会一	社会一		I 一般的なクル	
					社会一	社会一			
					社会一	社会一			
					社会一	社会一			
					社会一	社会一		I 一般的なクル	
					社会一	社会一			
					社会一	社会一			
					社会一	社会一			
					社会一	社会一		I 一般的なクル	
					社会一	社会一			
					社会一	社会一			
					社会一	社会一			
					社会一	社会一		I 一般的なクル	
					社会一	社会一			
					社会一	社会一			
					社会一	社会一			
					社会一	社会一		I 一般的なクル	
					社会一	社会一			
					社会一	社会一			
					社会一	社会一			
					社会一	社会一		I 一般的なクル	
					社会一	社会一			
					社会一	社会一			
					社会一	社会一			
					社会一	社会一		I 一般的なクル	
					社会一	社会一			
					社会一	社会一			
					社会一	社会一			
					社会一	社会一		I 一般的なクル	
					社会一	社会一			
					社会一	社会一			
					社会一	社会一			
					社会一	社会一		I 一般的なクル	
					社会一	社会一			
					社会一	社会一			
					社会一	社会一			
					社会一	社会一		I 一般的なクル	
					社会一	社会一			
					社会一	社会一			
					社会一	社会一			
					社会一	社会一		I 一般的なクル	
					社会一	社会一			
					社会一	社会一			
					社会一	社会一			
					社会一	社会一		I 一般的なクル	
					社会一	社会一			
					社会一	社会一			
					社会一	社会一			
					社会一	社会一		I 一般的なクル	
					社会一	社会一			
					社会一	社会一			
					社会一	社会一			
					社会一	社会一		I 一般的なクル	
					社会一	社会一			
					社会一	社会一			
					社会一	社会一			
					社会一	社会一		I 一般的なクル	
					社会一	社会一			
					社会一	社会一			
					社会一	社会一			
					社会一	社会一		I 一般的なクル	
					社会一	社会一			
					社会一	社会一			
					社会一	社会一			
					社会一	社会一		I 一般的なクル	
					社会一	社会一			
					社会一	社会一			
					社会一	社会一			
					社会一	社会一		I 一般的なクル	
					社会一	社会一			
					社会一	社会一			
					社会一	社会一			
					社会一	社会一		I 一般的なクル	
					社会一	社会一			
					社会一	社会一			
					社会一	社会一			
					社会一	社会一		I 一般的なクル	
					社会一	社会一			
					社会一	社会一			
					社会一	社会一			
					社会一	社会一		I 一般的なクル	
					社会一	社会一			
					社会一	社会一			
					社会一	社会一			
					社会一	社会一		I 一般的なクル	
					社会一	社会一			
					社会一	社会一			
					社会一	社会一			
					社会一	社会一		I 一般的なクル	
					社会一	社会一			
					社会一	社会一			
					社会一	社会一			
					社会一	社会一		I 一般的なクル	
					社会一	社会一			
					社会一	社会一			
					社会一	社会一			
					社会一	社会一		I 一般的なクル	
					社会一	社会一			
					社会一	社会一			
					社会一	社会一			
					社会一	社会一		I 一般的なクル	
					社会一	社会一			
					社会一	社会一			
					社会一	社会一			
					社会一	社会一		I 一般的なクル	
					社会一	社会一			
					社会一	社会一			
					社会一	社会一			
					社会一	社会一		I 一般的なクル	
					社会一	社会一			
					社会一	社会一			
					社会一	社会一			
					社会一	社会一		I 一般的なクル	
					社会一	社会一			
					社会一	社会一			
					社会一	社会一			
					社会一	社会一		I 一般的なクル	
					社会一	社会一			
					社会一	社会一			
					社会一	社会一			
					社会一	社会一		I 一般的なクル	
					社会一	社会一			
					社会一	社会一			
					社会一	社会一			
					社会一	社会一		I 一般的なクル	
					社会一	社会一			
					社会一	社会一			
					社会一	社会一			
					社会一	社会一		I 一般的なクル	
					社会一	社会一			
					社会一	社会一			
					社会一	社会一			
					社会一	社会一		I 一般的なクル	
					社会一	社会一			
					社会一	社会一			
					社会一	社会一			
					社会一	社会一		I 一般的なクル	
					社会一	社会一			
					社会一	社会一			
					社会一	社会一			
					社会一	社会一		I 一般的なクル	
					社会一	社会一			
					社会一	社会一			
					社会一	社会一			
					社会一	社会一		I 一般的なクル	
					社会一	社会一			
					社会一	社会一			
					社会一	社会一			
					社会一	社会一		I 一般的なクル	